

2012/10/19 酒井 敏 (京都大学 総合人間学部)

「あほなことせえ ---旧教養部の哲学---」 テープ起こし

ビデオ: [https://www.cps-jp.org/modules/mosir/player.php?v=20121017\\_sakai](https://www.cps-jp.org/modules/mosir/player.php?v=20121017_sakai)

(00:00:00 sec)

(司会) ……酒井先生にお願いします。一応室内実験のようなシリーズになっているんですが、たぶんその枠を超えていろいろ話をされそうな気がします。よろしくお願いします。

(酒井) 最初にこのお話をいただいたときは、室内実験の話ということだったんですが、室内実験の話、昔から教養部時代から私は室内実験をやっているんですけど、その話をするついでにバックグラウンドというか、そういう実験のポリシーみたいなものが昔からあるので、それについてお話をしようと思っていたんですけども、だんだんと最近特にどうも昔からいわれている、この「あほなことせえ」というのは、僕がもう1回生で入ったときからずっと言われていたんですけど、これはある種の文化で、この一言の中にいろいろな意味があるんですが、いろいろな意味をひっくるめて「あほなことせえ」と言ったら、だいたい通じていたと。

ところが最近どうもちゃんと説明しないと通じないということをひしひしと痛感しまして、最初はこの「あほなことせえ」といって適当にちゃかして実験の話をすると思ったんですが、どうもこれはまじめに説明しないといかんのではないかと気になってきたので、今日はこれをまじめに説明します。たぶんそれで終わるんじゃないかと思うんですが、時間が余ったら実験の話などをしたいと思います。その実験の話からいろいろあほなことを積み重ねた結果、現在あほなことをしまくって何をやっているかというところ、フラクタル日よけというのを作ってまして、それにも興味があったら検索してみてください。たぶんその話まではいかないと思います。

(司会) 途中で突っ込みはいくらでも。

(酒井) はい、突っ込みはどんどん入れてください。分からないところは遠慮なく質問をしてください。さっきも言ったように「あほなことせえ」というのはある種の文化で、文化というのは説明がいらぬものであるわけですが、どうもこれは本当に説明しなきゃいけないんだというのはつい最近思ったんです。よくある質問、「やっぱりまじめに勉強しなきゃだめなんじゃないの」、と。あほなことをせえと言うと、こういうレスポンスが来るわけです。答えは「当たり前」。まじめに勉強しなきゃ相手にされないだけであって、そんなものは当たり前やから言わない。

そうすると、「ということはまじめな話の内容は眠いから冗談の1つも言えということですね」と、言われるわけですが、それも違います。そういうことを言っているんじゃなくて、本当の大発見は、あほなこ

との中にある。あほなこと、だから実はこれが非常に重要なんだということを言っているんです。そういう意味なわけですが、そもそも最近話題のノーベル賞ですけど、ノーベル賞がなぜノーベル賞なのかというと、何でも非常にすべての人が、多くの人がこれをやればすごいよねと思うことが実現したって、それはすごいことすごいかもしれないけど、たぶんノーベル賞じゃない。ノーベル賞なのは、そんなあほなことと思うことが本当に実現しちゃったと。またはそれを実証しちゃったというレベルなので、ノーベル賞だったと。

ということは、ノーベル賞を目指すプロジェクトなんてありますが、何かそういうものを創ろうなんていううわさがあったりしますが、それをやるためには、あほなことをしなきゃいけないの。これだけでも最近の若い人に説明をするのが結構大変なんですけれども、これはまだ要するに突拍子もないことというのは、みんなどうでもいいようなことだと思っていたところに大事なものがあったからびっくりするわけで、そういうところにこういうネタがあるんですよというのは、まだ何となく分かりやすいという話で、「あほなことせえ」という意味にはもっとシュールな意味があって、まずあほなことをするというのは、ほぼ間違いなく失敗します。

あほだねと言われるのは、みんなそれをやらない。常識的にはやらない。なぜやらないかということ、常識的にそんなことはないと思っているからで、世の中の常識というのはそんなに間違っちゃいけないので、だいたいこういうことをやれば、あほだねと言われるだけ。ただ 100 個ぐらいやると 1 個ぐらい何かすごいことが入っていたりする、常識にもちょっと穴がある。ですから要するにそれを狙うという意味ですから、もともと歩留まりは悪くて打率は悪い、非常に打率が悪い。だからあほなことをして何か意味があることを見つけるには、99 回あほやなと言われ続けなきゃいけないと。

99 回あほやなということと言われ続けて、だいたいそれで、そんなことで自信を失ってはいけないわけですし、あほになりきる。あほや、あほやと言われても、はい、そうです、ごめんなさいと言って、それを気にしない。実はこの精神力を付けるというのは非常に難しく、昔の京大の教養部のまず最初の修行はこれでなかったのかと思っています。あほになりきってあほやと言われても別に気にせずに、あほですからすませんねと。それでずっとやっていると、100 回ぐらいあほと言われ続けると 1 個ぐらい何かある。

これがやっぱり非常に大きなポイントで、今みんな、あほになりきれないので、あほやと言われると怒る。怒ってそんなことはないと言って、一生懸命格好をつけようとするから、ろくなものが生まれないと。かっこつけようとするなど、あほになりきれというのが、「あほなことせえ」ということの 1 つの裏にある意味だと思います。さらにもっと別の意味があって、あほなことにはだいたいみつからない。世の中の人があほやと思っていたら絶対にかみつかわけない。だから最初からそんなことを期待してはいけなくて、ここは何とかするしかない。

何とかするというのは、誰かに甘えるということも実力のうちですから、そういうことも含めて何とかする。何とかして、要はあほになりきって、とにかくやりたいからやっているんやと、文句あるかと。その

スタンスをいかに押し通せるかということでないかと思えます。ですから、その意義であるとか、何とかということとはあまりかっこよく語らない。昔からそういうことはあんまり語らなかったんだと、京大というのはそういうところはあんまり語らずに、何か知らんけど面白いやんというところから始まっていたのが京大の文化じゃないかなと思えます。

こういうことがまったく通用しないということに愕然としたのが、実は去年になるんですが、去年の9月に桂で教育シンポジウムというのがありました。総人・人環は結構関係が深いので、毎年誰かが行くことになっていたんですが、僕はなるべくそういうのは避けて離れていようと思ったので、ずっと行かなかったんですけど、「ちょっと今年はどうしてもお前が行け」と言われて去年行ってきました。総長の基調演説というのが最初にあるんですが、総長は基調演説で彼が何を言ったかという、日本の研究員さんの数も研究費も、研究費の額、これも世界トップレベルであると。だけどGDPは日本だけ落ちていると。これは、ギリシャ以前の話かもしれませんが、これは人間の問題だと。

要するに生徒とかお金の問題ではなくて、そこのやっている人間の問題なのであって、だから教育をしっかりとしなさいというような話だったと思えます。それはそうなんだろうねと思うんですが、その後その会議の基調になっている流れを見ると、じゃあ、どういう教育をしますかといったら、15回しっかりと講義をやって、学生も15回しっかりと出席させて、単位の評価をしっかりとしなさいと。昔の京都大学だったらそこで「ナンセンス」という素人っぽい言葉が出るんですけど、まったく出ない。まったく出ないので何か居心地が悪くて、そそくさと僕は昼ぐらいに帰ってきちゃいましたけど。

その後、あれはおかしいよなという話を人環の中でもしたんですが、それがおかしいよなと言っても、そうだという返事が返ってこないんです。「こういうご時世だからね」とか、「しゃあないんじゃないの」って、そういう反応が返ってきて、あんたがそんなことを言っていたらあかんやろうと。なぜいけないかというのを、ちゃんと説明しなきゃならんなど。ここで文化が壊れたと僕は痛感したんですが、昔はそんなことは何も言わずに、言わなくても何となくおかしいよねと。何となくおかしいというのは、その理屈は自分でもよく分かってないんだけど、何となくおかしいよねというのでナンセンスと言って、後からどういうふうにくっつけようかと一生懸命考えるわけですけど、最初の文化がないので、何となくそれでもう押し流されちゃってしまう。

ちゃんと説明をしなきゃいかんということで理論をつくりました、説明をするために。その前になぜ15回出席させてという話がナンセンスかという、何でこの優秀な日本人がこれだけ一生懸命働いて、この不況から脱出できないかと。まじめ過ぎるからやと。

(00:14:52 sec)

なぜそんなことが起こるかといったら、10人でお米を作っていましたと。まじめに働いて効率的にお米を作るようにして、5人でできるようになったと。これ自体は非常に素晴らしい成果だと思いますが、問題は5人働けばお米が10人分できるにもかかわらず、10人がまじめに働くから20人分できちゃう。余っちゃうので売れなくてダンピングをして、これじゃあ食えないからもっと効率的に働かなきゃとい

うことで3人で作れるようになりましたと。もうどんどんその悪循環なわけです。

要は余った5人がまじめに米を作るからいかんのよと。5人余ったら、その余った5人は海に遊びに行けよと。海に遊びに行ったらナマコでも取ってこいよと。あれが、ナマコが食えることを発見した人は偉いでしょうと。そのナマコを取ってきてまじめに米を作っている人に、米だけだと寂しいでしょう、これうまいんですよと言ってナマコを高い金で(売る)。この高い金というのがみそなんですけど、高い金で売りつけて、その金で米を買って初めて経済が回るんです。だから効率化したらそれまで無価値だったものに価値をくっつけて回さないことには、経済が回らないわけです。なので、ナマコみたいなものを探して来る人が必要なんです。単に効率化するだけじゃだめですよ。

大学で教えられるのは、米の作り方はたぶん教えられる。効率化の方法というのも、これもある程度教えられる。だけど新種のナマコみたいなものがどこにあるか、そんなもの誰も知りませんから教えられるわけがない。だから若い学生を教室に閉じ込めておくのがいかんと、放り出さなきゃいけない。これを僕は「ナマコ理論」と呼んでいます。もちろんすべての学生が海に遊びに行ったらナマコを取りに行っちゃうと困るので、半分は米を作ってくれないといけない。

ですからもちろんそういう人は世の中に必要で、それはそれでいいんですが、それはどこかの大学に任せればよくて、京都大学は「ナマコ係」だったはずだろうと。ですからナマコ係としての京都大学というのが、どうも本当に壊れてしまったと。じゃあ、ナマコを取る人と、それから米を作る人、これはやっぱりどっちも必要なわけですね。どっちも必要なんだけど、どっちかだけというわけにはたぶんいかない。

(00:18:46 sec)

そこでその辺をいろいろ考えるために、今度「端っこ理論」という理論をつくったんですが、世の中いろいろな人をたくさん集めてくると、平均的な人を中心に、ある分布をします。ちまたではこれを偏差値と呼んだりしますが、偏差値30と偏差値70。これは世の中では偏差値30と70というのは正反対でまったく逆だと認識されるわけですが、これ座標軸が1個だからこっちとこっちは山を越えて向こう側で反対なんですけど、2つの座標軸を持つてくると、指標1と指標2を持つてくると、真ん中がここで、端っこはこういうふうにつながります。なので30も70もない。

ですから実は30と70というのは同じで意味がなくて、真ん中からどれだけ離れているかということだけが問題。これは人間を集めてくれば真ん中の人と端っこの人がいるのは、もうこれは当然で、この差が狭かろうか広かろうか、こんな分布をするわけです。世の中こんな分布をしていて、実は真ん中の人と端っこの人というのは、そもそも価値観が違う。生きている哲学が違う。真ん中の人間は決まったことをきちんとしてやる。そういうことでちゃんと評価されて、実は日本はそれが非常に得意なので、今までうまくいっていたと。こういうところの人がきっちり仕事をしてくれないと、新幹線も40年間無事故で走らない。同じ味の山崎パンを毎日食べられない。

京大生に同じ味の山崎パンを毎日作れといたら絶対そんなのは無理で、今日ちょっと塩を入れてみま

したとか、コショウを入れたんですけどどうですかねとか、それは不可能なんです。だからこの人たちというのは、この人間はこの人間で、それは非常に重要なんです、それだけだと例えば塩がなくなつたときに、塩の代わりになるものは何かないかと。探しに行こうと思ったら、何かその代替物質をこの辺のやつらが知っているとか。現在の状況がそのまま続く限りは、この真ん中の人たちだけでよくて、世の中この真ん中の人たちさえいればいいんですが、世の中がちょっとでも変わると、何かこの端っこの方の人間のやっっていることが必要になってきます。

何が必要なのかというのはよく分からないので、真ん中の人間から端っこの人間というのは評価不可能なんです。評価できない、評価してはいけない。勝手にやることで広がるというのが、これがたぶん自然な構造であると。この構造がないと、たぶん社会としては非常に脆弱になってしまって、ちょっとした変化に対応できなくなってしまうと。端っこの評価というのは結果でしか最終的には評価できないので、ほとんどは結果的にも最終的に何も使えないというので終わるんです。

だけどたまたま何かに当たると、それが評価されると。ノーベル賞というのはたぶん、こういうところにいるんだと思うんですけど。こういうのを何か許すというか許容する、そういうシステムがないと、たぶんこれは維持できないでしょう。実はこういう話は京都市の教育委員会の何かで会議に呼ばれて、京都の堀川高校というのがあります。堀川高校にうちの卒業生の飯澤君というのが行っています。彼は堀川高校のSSHを有名にして、非常に有名になっちゃったんですけど、それでうまくいったものだから教育委員会が何かシンポジウムみたいなものやって、彼と僕がその前で対談をしろと。何をしゃべればいいのか、いつもの雑談かといってしゃべっていたんですけど、そこで彼が紹介したのは、要するに堀川高校の生徒もうまく誘導するのに何をやるかっていうと、ほったらかすんやと。というか、まずほったらかすんですよ。

彼らは何かをやれと言っても絶対に言うことを聞かないので、京大と同じで言うことを聞かないので、まずほったらかしてその辺から始めると。何かやりたいと言い出したら、そうと言ってその辺をスタートラインにして、何かいろいろと結構面白いことを始めるんだと。それはまさに京大出身の飯澤君だからできる話ですが、京大のやり方をそのまま持っていったんです。そうするとうまくいっちゃって、いろいろなところで何とか賞を取ってくるというのが、ばんばん出ちゃったんです。

そういう話をすると当然会場からは、そのやり方は堀校だからできるんでしょと。そもそもレベルの高い堀校だからできるのであって、うちでそんなことをやったら偉いことになりますよという反応が出るわけです。それを彼はもう最初から読んでいます。それに対する反論というのを持っていて、堀川高校は毎年研究発表、ポスター発表をするんです、校内で。そのポスター発表に京都の某、どこかよく知りませんが某指導困難校と呼ばれる中学校の生徒を教育委員会が連れてきた。

その先生は「そんなうちの生徒に見せていったい何になるんですかと、まともに授業なんて聞いた試しもないやつらを、こんなのを連れてきて研究発表だなんてとんでもないと」と言いつつ、ぶつぶつ言いながら連れてきたらしいんですが、そのポスターを見た生徒が、俺らもこんなやりたい、どうしたら



たぶん彼の気持ちとしては、なぜ勉強するかといったら将来を予測して賢く生きるために勉強をする。だから将来を予測できる能力を上げるというところのために勉強しているはずなのに、もうできませんと、最後にそう言われてしまいました。せつかくここまできて、それは何だよという気分なんじゃないかと思いました。でもカオスだからしょうがないよねと思っていました。ただそのときに僕も何となく引っ掛かっていたところがあって、それは地球上生物三十何億年かずっと生き続けて、自然界はカオスで、世の中カオスで予測不可能だというのに、少なくとも地球上の全生物が死に絶えたことは、たぶんないですよ。よく知りませんが、たぶんない。

結構生物というのは、そういうカオスの世界でもしぶとく生きているじゃないかと。だからなぜそんなによく分からない、要するにさっきの学生はカオスで予測できないというのは非常に怖いと思っているからそういうことを言うので、それにもかかわらず生物はちゃんと生きているよね、何ででしょうということろが僕は引っ掛かっていたわけですが、それから何年かしてちょっといいものを見つけました。

(00:32:22 sec)

それは「スケール・フリー・ネットワーク」というやつなんです、スケール・フリー・ネットワークというのは、もともと社会学の話で、世の中は狭いという話。6人の友達を介して世界中の人と友達になれる、これはスモールワールドの例え。その構造が、スケール・フリー・ネットワークであるという話なんです。これ今、点々が世界の人だと思って、この線が友達関係だとしましょう。たくさんの人を持ってきて、ランダムにこの人たちを結び付けるということをやると何が起こるかということ、例えば任意に2人を持ってきて、はい、友達になりなさいということで、そうするとこれは横軸に友達の数、縦軸にその数の友達を持っている人の数、人口ですね。これを縦軸に取ると平均値があって、そこから正規分布図、ランダムにやればそうなる。

こうやると、どうもさっきの6人の友達を介すると世界中の人と友達になれるというのが、そういう狭い世界なので、つくれない。というか、友達の数をやっぼどたくさん増やさない、そうならない。現実にはどうなのかという調べた人がいて、実はべき則。べきでlogで書いて、log、logで書いてこういう直線に乗ると。これがマイナス3乗ぐらいらしいんです。これを何にするかということ、logですから友達の数をやたら多い人がなかなかゼロにならない。ここはゼロじゃなくて、ゼロはこの辺にありますので、なかなかゼロにならない。ですから、とてつもなく交友関係の広い人が少数だけありますよ。

それからとてつもなく寂しいやつが、とてつもなくたくさんいる。世の中、非常に不平等だというのがまず特徴。仮に僕らがここにいたとして、ここだったとしても、僕よりもたくさん友達を持っているやつの方が少なく、僕よりも寂しいやつの方が多いため、何となく安心できると。どこに行っても同じです。どれだけ友達を持っていても、何か俺よりも寂しいやつの方が多いためと思えると。という意味で、要するに特徴的な友達の数というスケールがない、こういうスケールがないんです。

平均値というのが決まっています、たぶん平均値よりもちょっと少ないと、俺なんかやっぱりやばいんじゃないかと思って、多いと思うといっぱい友達がいるもんねと言えるんですけど、ここだと少々こんなこ

とがあっても、さほど変わらない。なので、どうも世の中はこういう構造をしているらしいと。これを本当に調べた人がいて、何かの脇役俳優、何とかペーコンという脇役俳優と共演したことがある俳優というのをリストアップして、その人がまた共演したことがある俳優というのをリストアップして、要するにそれが友達関係で、俳優の現実の世界でこういう図を描いて、こういうプロセスと、これはべき則になると。

これの典型例がこれなんです、これはたぶんウェブのリンク構造をロボットで集めてきて、収集してきて図にしたものです。もう訳が分からないですが、やっぱり非常にたくさんのリンクを集める、巨大なノードと呼ばれるものがいくつかあります。たぶんこれはYahoo!とかGoogleとか、これは古いので2001年の論文です。実際に調べると、そういう巨大なノードというのがいくつかあって、それに対して寂しいブログみたいなものがこの辺にある。それが一般で、どうもこういう構造をしていると。この構造は、これもさっきのべき則に乗る。べき則に乗るようなこういう構造になると、特徴としてはまずどこかがぶち切れても、全体がばらばらになるということはまずない。必ず迂回ルートがあったりするんです。

この構造自体はウェブのリンク構造、論理的な構造だけじゃなくて、物理的な構造もこんな感じになると。インターネットというのはそもそもそういうポリシーで、すべてを中央がどこかよく分からないけど、みんなで何とかつないでいくというポリシーで、どこかが悪くても何か迂回ルートを通して必ず行っちゃう、こういう構造になっているわけです。どうもリンク構造もそうになっていて、どこかがリンク切れを起こしても完璧に孤立してしまうということはまずない。

そういう意味で非常にロバストだと。どこかがぶちんと切れたら、あとそっちがもう完全に別世界になってしまうというようなことが少ないロバストな世界。それから実際にそうなんです、ウェブの世界であれだけいろいろなページがあるんだけど、わりと少ないクリック数で目的のページにたどり着けると。つまり、わりと最短ルートが短い。それがさっきの6人の友達を介すると、世界中の人と友達になれるという話と結び付くんですが、どうもそういう構造を持っているらしい。

そういう良い面もありつつ、あと、この世界というのは誰かが設計図を描いて、その通りに何かをやったというものでなくて、みんな勝手にやっている。つまり非常に無節操な世界。そもそもどうやったらこういう世界ができるかという、数学的には新しいリンクを付けるというのと、あとリンクを付けるときに、こういうもともと持っているリンクの数に比例した確率で相手のリンクを決めると。つまり当然たくさん持っている、人気のあるところにはたくさんリンクが集まってくるような法則があるんですが、そういうことをやると、こういう構造が出来上がる。

ただし大事なのは最大値を必ず選ぶというんじゃなくて、確率的にそういう確率で選ぶということなので、小さいところに付ける確率もそれなりに残っているというところがポイントで、その、ポリバレントというらしいですが、人気のあるところに付けたがる、そのパラメーターをあまりきつくすると、実はこういう世界ではなくなって、一気に相変化が起こってマイクロソフト帝国になるらしいんです。すべてが一点に集中する。これは相変化が起こるらしいです。ですからある程度ばらけさせつつ、だけどそれは人気のある人はやっぱりカッコいいので、みんなリンクを付けたがると、それを許容する。ある程度ば

らけるというのをやると、勝手にこういうふうになります。

勝手にそうなると非常に世界は狭くなって、そしてある意味効率的なんですが、ある意味効率的とか短いんですが、実はいろいろむだなところもあって、その瞬間で見るとむだな構造というのがいっぱいあると。それからもともと設計図がないので、どこが中心ということも決まってない。ですから例えば一番手が何か故障したとしても、必ず二番手がどこかにいて、何となく代役ができる。その変化も非常に連続的にいろいろなことを変化させていて、そういう意味では柔軟であると。

柔軟かつ強靱で最短のパスも短いという、そういう構造がこういう構造としてどうも出来上がっていて、それがさっき言ったようにわりと勝手にやることができるんだと。それと対照的なのはこういう構造なんですが、いわゆる組織図というやつです。社長さんがいてというような図が、ここをぶちっと切ると、これは全部こっち側が外れます。1本切っただけでばらばらになっちゃう。それからこの人を中心に、もう1回こういう図を描こうとしても、これは革命を起こす以外になくて、要するに連続的にこの人をここに持ってくるという、つなぎ変えというのが非常に大変なわけです。

ところがこの構造は連続的にじわじわと変えられる。これがぼしゃっても、二番手が何か代役でできる。そういう意味で非常に柔軟に対応ができますよ。ということで、さっきの話に戻ると、実は生物というのは勝手に生きることで、カオスの世界の勝手に生きることで一番効率のいい生き方をしているんじゃないのかなと。つまり勝手に生きる、カオスの世界を勝手に生きていることで、何となくこういう世界をつくってしまう。個々の生物は別に何も考えてないんだけど、ある勝手な行動が全体として非常に最適な構造をつくり上げる、ロバストな構造をつくり上げる。だから結果的に非常にしぶとい構造になると。

よく考えてみればカオスの世界、予測するというのは意味がないわけです。予測ができませんと言っているんだから。だから予測したって意味がないので、行き当たりばったりで生きると。つまり目の前に問題が起こったら、その問題は起こってから考えて、それでその解決にすべての労力を費やして、予測するなんていう行為に労力を費やすのはあほだと、これがカオスの世界の話です。どうもそれで生きているんじゃないかと。生物はそうやることで、非常にしぶとい生き方をしているんじゃないかなという気がするわけです。

そう思うと、ホリエモンというやつがいましたが、彼がなぜ強かったかというのが何となく納得しちゃう。なぜかという、たぶん彼は何も考えていない。彼はいつも想定内と言っていました。たぶん何も考えてないので想定外があり得ない。問題が起こったらその場で考え、じゃあ、こうするよと。また違う問題が起こったら、じゃあ、こうしよう。その前に言ったこととその後で言ったことは全然整合性がなくても、だって状況が変わったんだからいいじゃん。まったく無節操な、たぶんそれが一番効率的であって、一番賢い生き方なんですと思うわけです。

ただ人間の社会は、それだとあんまりだよねと思うところがあるので、一応人間社会のルールというのを作ってあって、たぶんホリエモンはそれを無視しちゃったので捕まっちゃいましたが、たぶんルールのない世界だと彼が一番強いんじゃないかなと思います。先ほどのこれも決して悪いわけじゃなくて、非常

にある意味理路整然と効率的なので、これはこれで、この構造という、例えば物理にしても数学にしても、我々のいわゆる勉強した頭の中からだいたいこんな構造を取っていることが多いですね。これ自体は、たぶん悪くない。

ある程度こういうふうに整理をしたからそれなりにというか、ある程度の予測能力は人間は持つことができ、だから明日の天気は何となく当たるわけです。さっき吉田の南キャンパスを出るときにウェザーニュースで雨雲予測をしたら、雨が降り始めるまで7分と出ていました。結局降りませんでしたけど。でもそれなりに当たるようにはなっています。ですから直前のことはある程度予測できるようになって、それはこういう構造で人間がいろいろなものを整理したと。だけど1カ月先の天気予報が当たるかといったら当たらないはずで、それはやっぱり大きなところではカオスの世界という、だから大きな世界としてやっぱりカオス的な自然界に生きているということは、これは逃れられない事実です。その中で少し整理してこういう世界をつくっていきこうというのが、たぶん人間の賢いところなんだろうなと思います。

(00:50:29 sec)

それでここから今度は「論理性、独創性、創造性」、これは何年か前の科研費の会議のスライドをちょっとそのまま持ってきたんですが、その科研費は何だったかという「理科離れ対策」なんです。理科離れ対策の科研費をもらって、気温観測を始めたというのが最近の僕の話の出発点になっているんですが。そのときに理科離れ対策の科研費のタイトル、新世紀型理数系教育というタイトルがあって、サブタイトルに論理性、独創性、創造性を育てますと書いてあったんです。僕はこれ非常に違和感があって、何でこの3つが並ぶんだと。

独創性と創造性は似た者同士だからいいですが、論理性とこの2つは真逆やろうと。論理がぶっ飛んでいるから独創性、独創的。あほかお前というのも、よく言うと独創的ですね。ですからたぶんこれはぶっ飛んでいるから、こういうことになるのであって、これは真逆の話です。それが一緒になって非常に居心地が悪いと思って、その科研費のメンバーにいろいろ話をしたんですが、どうもその話を通じる人があんまりいない。その科研費には教育系の人を中心にしているんですね。もともと理科離れ対策で。それ以外に僕みたいに教育系プロパーじゃない人間も、そういう人間も入れて科研費の特定研究をやれという文科省からの指令で何かそれができたので、何かそういう外様が入ったわけですが、その外様の中ではわりと話を通じるんですが、教育系の先生にこれはまったく話を通じないんです。

なぜ通じないのかなと、よくよく聞いてみると、彼らから見た論理性、独創性、創造性、これは全部同じなんです。賢いという意味しかない。ですから、ええもんと言うしかない。すべて褒め言葉であって、論理的で創造的ですねというのを平気で言うわけです。なので、これはほとんど彼らにとって区別がない。どうやら彼らにはこの区別がついてないということが分かったので、実はそれでさっきのような図を持ってきて、独創性、創造性というのは論理的なやつと違うんだというのがこれ。まさにこれは論理的な構造。論理的な構造というのは、さっきの物理・数学もそうなんですが、論理的にはすべてこういうふうに公理があって、定義があってというので、きっちりつくっていると。

これをつくり上げたのが人間で、ある意味組織的、効率的。これ1個を知っているとすべてが導き出せるというような意味で効率的なわけで、これがまさに人類の英知なんです。ですがこれの欠点は、まず硬直的であると。つまりさっき言ったようにこの人をここに持ってこうと思うと、これは非常に大変なんです。要するに変化させろということは、すごく難しいわけです。それから、それはさっき言ったように、ここを1カ所切るとぶちんと全部切れちゃう、そこから下が完全にはがれてしまう。これは効率的であるということの裏腹な特徴なんです、まさにこれが現代の病理であると。

これを追求し過ぎると、やっぱり非常に危うい。それに対してたぶん独創的とか創造性というような話は、こういう構造から生まれている。要するに論理はぶっ飛んでいるけど、たまたま何か見つけたとか、たまたま起こったこと。ノーベル賞もそうですが、島津の田中さんなんかも失敗して、失敗したところに何かできていたとか、そういう話は多いわけで、最初から論理的に何かやったわけじゃなくて、何かたまたまできたものを、ただ見つけていくというのが、そういう大発見につながると。

独創的というのはやっぱりなぜ独創的かということ、みんな論理的に嫌がるからそういうところにたどり着かない。論理的にたどり着かないところを見つけるというのは、やっぱりそれはぶっ飛んだところでたまたま見つけるというようなことがないと、たぶんそういうことは起こらないでしょう。こういう構造はさっきのスケール・フリー・ネットワーク構造なわけですが、いいところで言うと柔軟、強固であると。そういう意味で非常によくて、自然界はたぶんこれをベースに出来上がっていると。だからカオスの世界でも、そんなとんでもないことにはならず生物は、恐竜は絶滅しましたが、誰かが生きていますという構造になっています。

ただこれはいいことばかりじゃなくて、悪いこともいっぱいあります。今どきの評価をすると悪いことばかりなんです、まず無駄、無計画、予測不能、身勝手。最近のマスコミではこれを非常に強く言いますね。教育界では、身勝手だ、自分のことしか考えてない。だけど身勝手に行動をすることが全体の利益につながるんだというのがこれなんです。計画的にやると手順が狂ったときに大変なことになるわけですが、もともと計画性がないから、だから柔軟かつ強靱なんだと。そもそも世の中は平等なんじゃないと。これはさっきの、この構造からしても分かるように、少なくとも瞬間的には平等な世界ではなくて、もう非常に不平等で落差の大きな世界にある。ただし可能性としては、みんな平等かもしれないという世界です。

これを許容しないとやっぱりカオスの世界は生きていけないでしょう。実は独創性とか創造性とかいう、さっき科研費の話に戻ると、そもそも独創性、創造性というのはどうやってなるものでもない。子供が勝手に持っているものだ。何も知らないから独創的であって、創造的なんだと。それを大人が教えるというのはおこがましい話であって、大人は何も言わないことがよるしい。だから何も知らない小学生に教えられるのは論理性であって、小学生には詰め込みでいいんだと僕は思うんですが、基本的にはですよ。あんまりきっちりさせ過ぎると困るんだけど、やつらはどうせ勝手にやるので、それはある程度許しつつ、許容するという以外にないんです。

許容して大事な、この構造はやっぱりたたき込んでおかないと人間社会として成り立たないので、これをたたき込むというのを小学生のときにある程度やるべきことだと。だけどこれだけじゃだめよというのは、中学、高校ぐらいになってきたら、そろそろこういう世界も重要なんだということを言わなきゃたぶんいけないんだと。おそらく昔の大学の生徒というのは、僕らが入ったところというのは、高校まではとにかくこういう形で受験勉強をしてきました。大学に入ったとたんこんな世界になっちゃって、さあ、どうしようって困って、みんな5月病になって、ふらふらすると。

なんですが、何となくこの辺は居心地がいいなと思いはじめると、何かいろいろなことができて、いろいろとんでもないことをし始める。この世界が何となく居心地をよく感じるようになるために教養の2年間というのは必要で、こういうものは常にもやもやとした、もともと何か目的があるわけでもないし、組織的なものでもない。何か非常に廃れたような雰囲気、非効率、どうしようもねえな。だけど何か味があるよねというところを持っていたからこそ、京都大学というのがあったんだと思うんですが、今はほとんどそういう妙な味というか、妙なあれがだんだんとなくなってきた、何かよく分からない公式でつくった、よく分からない樽の中のうまい酒だったんですが、今は誰かさんがステンレスの樽に置き換えて、衛生管理をきっちりしようとしているので、ろくにうまくもないけど、飲めなくもない、料理酒ぐらいには使えるでしょうねというような酒しか造れなくなっちゃったと。

それは工業的にいくらでも再生産が可能なので、効率的にたくさん量産すればいいんですが、さっきも言ったように、それはどこかに任せておいてほしいと。京大はやっぱり何か怪しげな樽の中で、誰かが「べっ」てやったのがうまい味を出すのかもしれませんが、そういうものが何となく発酵して、何となくこういうものを作っているという、そういう世界をやっぱり維持しておかないと、やばいんじゃないかなと思います。昔の教養部というのは、まさにこんなことを、ずっと周りからは教養部はけしからんとかいろいろ言われつつ、何となく維持していたんですが、そろそろ限界でちょっとやばくなってきたと。ちょっとというか、かなりやばくなってきたと。

これは『熱気球イカロス5号』という本なんですが、梅棹忠夫の息子、梅棹エリオが書いた本なんです。梅棹エリオというのは、どこかその辺の中学を出て平安高校に行ったんだけど、中退して鴨沂高校に入って5年かかって高校を卒業して、今でも「誇り高く無職」だそうです。これが面白いのは、高校を卒業する直前ぐらいからその辺に住んでいますから、京大生を巻き込んで熱気球を作ろうと。

その当時熱気球を作って飛んだ人が日本でなくて、だから実は彼が熱気球で日本人として初飛行をした人なんです。その顛末が書いてあるんです。読むと、とんでもないことをして、京大生に相似則からいろいろなパラメーターで計算させて実験をする。何をやろうとしたのか、いまいよく分からないんですが、お湯を沸かして、お湯を80度ぐらいにするとレイノルズ数がちょうどいいので、その中で気球の模型を動かして何か実験をすると。その80度のお湯を沸かす樽を作って、それをどこかの風呂釜を持ってきて何日かかけて沸かして、そんなことをやっているとならガラスが割れて水びたしとか、お湯びたしになると。

それからお湯を入れて実験をしようとしたら滑車が絡まって、その風呂おけのお湯の底の方で動かなく

なっちゃって、これをどうやって回復するか、誰が潜るかということで何か壮絶な戦いをしたとか、そういうことが書いてあります。これは僕の友達に教えてもらって読んだんですが、僕は非常に面白くて、僕は実は本を読むのが大嫌いで、読書感想文を書けとって本を出されると、本気で熱を出して寝込んでるんです、小学校のときに。だから1週間をかけても1冊の本を読めないんです、だいたい。この一生で何冊か一晩で読んじゃったというのがあって、そのうちの1つがこれです。

面白いので、結局寝られなくなって全部読んじゃいました。これは面白いねと言ったら、じゃあ、あげるよと言って原本というか昔のやつをもらったんです。彼が言うには、面白いと言ってくれる人が少ないんだと。これを読んだら怒りだすやつがほとんどだと、けしからんと。何がけしからんかという、梅棹エリオというのは高校でみんなと一緒に修学旅行で京都駅まで一緒に行くんですが、みんなが九州に行ったのに自分だけ青森に行って帰ってくるか、何かとんでもないことをすると。だから5年もかかるんですが。

そういうのがとにかくけしからん、とんでもないと。さっきの実験の話なんかも、とにかく危険なことをやりだすという以外に、たぶん評価のしようがないんだと思うんですが、僕から見ると非常に面白いです。だからたぶんこの本が面白いと思えるかどうかというのが、真ん中か端っこかのいいリトマス紙になっていると。これは面白いと思える人は、たぶん真ん中の論理で生きてはいけないと思います。どっちなか読んでみてください。

(01:08:57 sec)

(司会) どうぞ。

(QQ) ということは、あほグラフは、あほなことをするグラフは正規分布やっばりだめなんですか。

(酒井) どれ。

(QQ) 最初の方に30から70になって、もしかすると世界で一番あほはいつまでも決まらないぐらいに、端が伸びていく。

(酒井) どうやったって正規分布はするので、ここにすべてを持ってこようという努力はむだだと。

(QQ) はい。

(酒井) つまり今一生懸命いろいろなところでやろうとしているのは、ここの価値観で全部こっちに持ってきなさいということをするわけです。さっきの理科離れ対策のときに、やっばりなるほどねと思った

んですが、ある先生に調査をしたら、文科省はこっちの方、いわゆる落ちこぼれという、落ちこぼれ対策を一生懸命やっている。だけど彼が言うには調査をすると、実はこっち側に浮きこぼれというやつがいる。浮きこぼれというのは何かというと、隠れ理科好き。理科が好きなんだけど、そんなことを言うと、めった打ちにされるので隠れている。隠れ理科好きというのがいて、実は文科省がいう落ちこぼれ対策と同じぐらい、こっちの対策を立てなきゃだめなんだということを広島大学の先生が言っていました。

この割合が5%です。それで、ああ、やっぱりと思ったんですが、 $2\sigma$ ですね、だいたい。 $1\sigma$ 離れると、もう話ができない。たぶんこいつらはこの辺の論理で言うと、もう話ができないんです。だからいくらやったって、いくら何か言ったって勝手にやってしまう。さっき言ったように端っこ人間は、こうやれと言ったって絶対にやらないというのと同じで、ここはもはや、なぜこうやらなければならないのかよく分からないので勝手にやってしまう、無視してしまう。

そうすると、けしからんといって怒られるわけです。ですが彼らにはなぜ怒られるのかよく分からない。僕らが中学校、高校のころは先生が忙しくて、こんなのに構ってられなかったのが放っておかれたんですが、最近ゆとり教育で先生にゆとりができたので、ここをたたくんです。それが問題。それと同時に、こっちも引っ張り上げようとするわけです。先生は全部ここに収めようとするわけなんです。だけど、こっちもこっちも寄ってこないんです。それはもう定義によって彼らは知らん顔で独立独歩の世界ですから。寄ってくるのは、この辺の連中は話が分かって寄ってきちゃって、結局ここに大きな溝ができる。

僕はその話を聞いたときに、理科離れ対策として、この端っこに対する対策をしたってだめですよ。この真ん中辺のこの人たちに、ここの人たちにこっちが重要だという意味をちゃんと教えないといけない。これの橋渡しができるのは、ここの人なんです。ここの人間に、実はこれも重要だし、こっちも重要なんだということを教えないから、教えずに全部ここの人間をこっちに持ってきちゃうから、ここが完璧に浮くんです。だからここはこの辺の人たちにちゃんと両方の役割分担、重要な役割があるんですということを理解してもらわない限り、この問題は解決しないだろうと思います。

今はどっちかということ、みんなそっちに。なぜこっちに寄っちゃうかということ、さっき言ったように世の中カオスだということを前提に物を考えないので、これが正しくてすべてこれでいけると信じて疑わないからなんです。世の中カオスだということを世の中に訴えられるのは、地球科学の人間しかいないと。ということで、僕は地球科学が重要だと思っています（笑）。

(司会) ほかに。

(QQ) すみません、コメントなんですけど、関数の最適化みたいな話があって、すごいなめらかな関数のミニマムを探すのは勾配法、勾配を使ってニュートン法みたいなのは早いんですけど、すごいたちの悪い、ローカルミニマムがいっぱいの中からグローバルミニマムを探すようなやつだと、遺伝子アルゴリズムとか。そうすると遺伝子とその科学値を対応させて集団として進化させていってミニマムを探す。そ

のときに突然変異レートをある程度ちゃんと入れておいて、変なやつを時々作りださないとローカルミニマムにトラップされちゃうと。すごい今回の話に近い気がして。

(酒井) そうだと思うんですよ。実は自然界というのはそういう突然変異というか、そういうものに頼って生きていて、そもそも生物って何で寿命があるのと。何で寿命があって子供を産んで一生懸命教えなきゃならないのかと。完璧な生物がいたら、そいつがずっと生きていけばそれでいいじゃないと思うんだけど、そうじゃなくて寿命があって、だからさっきの教育問題なんかも起こるわけですが、教えなきゃならないわけですね。何でそんな労力を払わなきゃならないのか、それはたぶん同じことをやっていたら絶対に生きていけないので、変えなきゃならない。個体はたぶんそう簡単には変えられないようにちゃんとできちゃっているんで、作り替える。作り替えるためには、要するにかなり根本的に作り替えるということも必要で、そのために常に再生産をする。

だから子供をつくるというのは、要するにコピーをつくるわけですが、その一番重要な役割はミスコピーをすること。同じものをつくったら意味がない。ミスコピーをするために、わざわざ子供をつくる。だからそうやって生きているんだと思うんです。まさに言われたように突然変異パラメーターも入れておかないといけないというのは、まさにそうだと思います。それで生物界というのはできていて、すべてをロジカルにやっている、こういう世界ではうまくいかないだろうと思うんです。

(QQ) それで質問なんですけど、こういうご時世にあって我々は革命遺伝子というか、あほなこと遺伝子というか、そういうのを保ったりどうしたらいいんでしょう。

(酒井) いや、そう。僕もそれは非常に難しいなと思っていますが、最近僕は京都大学で100年賞味期限切れというのを唱えているんですが、もう京都大学は100年たって賞味期限が切れた。ここで同じことをやろうと思っても無理やと。つまり酸っぱくなった酒は元に戻らない。やっぱり突然変異をしなきゃいけないくて、組織、生物もそうなんだけど、やっぱりある種のまとまりを持ってしまうと、ある方向にしか行かないわけですね。それは不可逆で、不可逆過程で、組織の論理としてきっちりと管理をせよというのはある意味正当な論理なわけですが、それに真っ向から反対をしているわけですけど、それはやっぱり組織の論理としては成り立たないことは重々承知の上で、じゃあ、どうするかというと、もうそれは全然別個のものを作るしかないじゃないと。新しい樽に、新しいこうじ菌を仕込むしかないよねと。

(QQ) 分かりやすい。

(酒井) という気に最近なっています。数年前までは何とか京都大学の賞味期限切れを何とか食い止めようと、食い止めないといけないというような意識があったんですが、最近はやっつともはや手遅れとい

うあきらめの境地になってと。だから同じもの、同じ個体がずっと生き続けなきゃならないという論理もないんだから、同じ組織である必要もなく、だめになったらだめになったで、また作ればいいじゃんというのが、たぶん生物の生き方だと思うんです。

(司会) どうぞ。

(QQ) 話を聞いていたコメントなんですけど、僕はあんまり普通のことをしたくないタイプなんですけど、それは何でかという今ちょっと聞きながら思い出したら、大学受験のときにまじめに高校受験の勉強というのをやっていたんですけど。

(酒井) まじめに高校受験。

(QQ) あっ、大学受験です。大学受験のときに高校まではしっかりきっちり勉強していたんですけど、大学受験の日に38度の熱を出してだめになったんです。それで浪人して、そのときに会ったやつが、文学青年の酒飲みだったりいろいろなやつがいて、要はまじめにやってもどうにもならないということがあるんだなと気付いたときに、じゃあ、しょうがないと思って、しょうがないじゃないですね、理学部に行くかと思ったんです。薬学部志望だったのに理学部に変えて、そういう世界があるらしいことを聞いていたので行くことにしたんです。だからそういう何かしら人生のイベントの中で、転機になるような何か、だから今は何が言いたいかというと、まじめにやると報われるだけの世界、それが面白くないなと思って。

(酒井) そうそう、それはそうだと思います。そこまでのいい経験じゃないんだけど、似たような経験もあって、出身は清水なんですけど、高校のときに清水に原水爆禁止運動に参加するためにポリネシアから帆船が来たんですけど、台風巻き込まれて何だかエンジンも動かなくなって清水港に緊急入港したと。ボランティアを求めているという新聞記事があったので、ほいほい行ったんです。それで何か手伝うことはない、そうしたらロープを結び付けるT字型の、金具じゃなくて木で作ったやつがありますね、マストに付けるやつ。これが折れちゃったからこれを作ってくれとって、ほいさと言って休みに一生懸命1日釘をここに打って、夕方に、はい、できたよとって、じゃあ、また明日来るねと言おうとして、「I will come yesterday」と言ったんですね。もう即座に tomorrow と直されたんですけど、そのときに俺はいつたい何年英語を習っているんだろうと。

これはまさに、まじめに英語をやったってだめじゃんという気になりました。そこから僕は英語の先生に反抗して試験に出る英単語の勉強をしてこいと、毎日授業の前に小テストをやるんですけど、その勉強は一切しなかった。非常にひねくれていました。たぶん何かひねくれるやつって、どこかでそういう経験をしているんです。

(司会) ないですか。なかなかない機会だから、何か。

(QQ) ひねくれないで育ってきたんですが(笑)。さっきのガバナンスというか、研究者の分布の中でもそうで、何が言いたいかというか、数年間ファンディングエージェンシーの中で研究者の中の科研費制度の、あれだってみんなで手を付け合って、端っこから、イノベティブなことから遠い制度を。。

(酒井) 端っこを切ることを目的じゃない。

(QQ) それは半分は言い訳があって、それ以前は村社会でボスが分けていたみたいなのに比べたら、ピアレビューで公平な制度になったと自負しているんだけど、それと同時にまさにそういう研究、ファウンドしないといけないときに端っこを切っているんじゃないかと。

(酒井) だからそれは1つは研究者側というか、端っこの人間の覚悟が足りんと、1つは思うんですが、そもそも金が来るわけじゃないんですよ。

(QQ) だから税金の使い方について。

(酒井) 税金の使い方としては、それは正しいんです。税金の使い方がそれは正しくて、そもそもあほなことをやるのに金が来るわけじゃないんだから、それを当てにするというのがそもそも間違いなのと僕は思います。だから税金の使い方としてはそれでいいんだけど、とはいえ端っこ人間をあまりにも絞っちゃうと生きていけなくなるので、最低限生きていけるぐらいのやつを、だから薄く広くというのは絶対に必要で、薄く広く生きていけるぐらいのやつをベースにばらまいた上で、税金としては集中投資をします。

あと薄く広い部分は、これは何が起こるか分からないから、ここだけやっていたってだめなんですという理屈で、そこはもう評価しようがないので、薄く広く以外にあり得ない。その理屈をちゃんと許容してもらわないと、成り立たないんです。そこで薄く広くで端っこの人間が満足しないというのは、やっぱり問題だと思います。

(QQ) 要は薄く広くが限りなく、もうゼロになっているのがあるので。

(酒井) そこはゼロにしちゃだめで、それはたぶん絶滅への道だと思います。

(QQ) ついでだから言いますが、ファンディングエージェンシーが問題なのは、こんなことを言っ

ていいのか分かりませんが、人事とか、それからポストの当たる当たらないの。何か平均点主義なんです。だから 10 年に 1 発で当てようなんていう気持ちの人は、たいがいポストには当たらないですね。それはかなり致命的だと思います。

(酒井) そういう意味では昔の教養部はよくて、1~2 回生と遊んでいたらよかったです。それで取りあえずご飯は食べられればいい。これは絶対自分では当たると思っているけど当たらないようなことを、無駄なことをずっとやり続けても、とにかく 1~2 回生の面倒だけ見ていると、取りあえず飯が食える。だからある意味、「暇職」というのをつくっておかなくちゃいけないですね。だからみんながみんな 100% 一生懸命生きる世界というのをつくっちゃいけないと、暇職がないといけません。

海に遊びに行ってナマコを取ってくるやつというのは、たぶんそんなに一生懸命やってないはずで、どっちにしても。

(QQ) だから本人はあんまり言いたくないかもしれないけど、グッドデザイン賞を 2 回取っていて、1 回は金賞という…。

(酒井) 昔、教養部で散々遊ばせてもらったからできたと思っているんですけど。そういう意味でそういうのがないと、たぶん。

(QQ) 私がこういうことをしゃべるのも、そういう世間の価値観、グッドデザインも汚れる。

(QQ) さっき生き物の進化というか例えがありましたが、それはもうちょっと考えることがいると。生き物の、確かにランダムな、遺伝的なものにランダム性というのは絶対に必要なんだけど、もう 1 つはそれで何というか変なものが出てきたときに、そこに選択圧がどう変わるかで進化したときもあるでしょうけど、今はどっちかという京大生とか、京大が持っているそういう何かポテンシャルとしてのランダム的なものに依存するだけでなく、じゃあ、そこに京大というのはどういうふうに変化するのか。京大自体も、もちろん圧がかかってくるわけですけども。

だから最終的には、1 つはさっきの酔になった酒は飲まんという意味でも、京大がそういうふうなことで、京大とか世の中はそうなんだからというのを、割り切り型もそうだけれども、京大のやっぱりでかさとか、あるいは教養部の持っているバラエティーが、それこそ広く薄くで十分に 1 つの魅力だと僕は思っているんですけども、よそから来た、外から来て、でかい大学に来て、何かいろいろな人がいるということのすごさというのは、十分すごい守っていると。それがどうなんです、うまくいっているのかいっていないのか、教養部の将来の組織がどうだというときに……、そのバラエティーを担保し続けることが本当にいいと思っていれば、やっぱり十分いけるんじゃないかと僕は思うんですけど、その辺の教養部

の団結の仕方みたいな、哲学というのは結局どうなっているんですか。

(酒井) そこが僕がもう手遅れかなというゆえんで、さっきも言ったように昔は文化などで何も言う必要も、説明する必要もなかったんですね。そんなのは当たり前やで済んでいたんですが、僕は教養部が解体されて20年ぐらい前に総人・人環になりましたが、あの時点ですでに京大の第2東大化が始まると当時は思っていたんですけど、しばらくはやっぱりイナーシャの大きいところで、そう簡単にはならない。だけど組織を変えて外からいろいろな人が入ってきて、もう組織が変わって20年ぐらいになりますから、そうするとやっぱり昔の文化を持った人間というのは、ほとんどいなくなってくるわけですね。

今の研究課長は昔の文化を持っている、たぶん最後の世代ぐらいのところで、だから一生懸命頑張って抵抗しているんですけど、やっぱりそういう歴代の人たちがどんどんいなくなってくると、本当にそれで自信を持って、頭の中で考えてじゃなくて、自信を持って自分のポリシーというか、自分自身の考えとしてそういうことを訴えられる人というのは、少なくなっちゃっているというのも事実です。というか、ほとんどいなくなっちゃったのは事実です。それ以外の、そういうさっき言った去年の教育シンポジウムときにそんな話が出てきて、実はみんなナンセンスとほざきたいんだけど我慢しているのかと思ったら、そうじゃなかったというのが非常に愕然としたんですが。

実は20年前に教養部がつぶれたときも似たようなことが起こって、20年前も教養部はなかなか面白くて居心地がいいですよという人が結構多かったんです。それで外で教養部はけしからんという声が上がっていても、そんなもん簡単にできるわけじゃないかと高をくくっていたんですが、実は教養部はいいですよと言っている人の中に、実は俺も教養部の教官なんてそんな身分の低いところじゃなくて、××学部の教授であるべきだと。こんな不遇なところにいるのはけしからんと思っているのが、過半数を占めていたという、隠れキリタンじゃないですけど、隠れていたのに気が付かなかったんですが、気が付いたらクーデターが起こっていて引っくり返していたわけです。

だから世の中どうなるか分からないですけど、それでクーデターが起こっちゃったものだから、もともとそういう昔の教養部の味を出してきた人たちというのが嫌気がさして、どんどん外に出て行っちゃったと。ですから、そういう意味でどんどん弱体化の方向にはずつときいて、それはもう20年間のトレンドで、それでも何とかならんのかなと思っていたのが10年ぐらい前までなんですが、どうもここ10年ぐらいはもうちょっと戻しようがないんじゃないかと。つくづく思うのは、文化って1人じゃできない。何も言わなくても通じる相手がいないと、文化は成立しないんです。その理屈を、理由をわざわざつくってご説明申し上げなきゃならない時点で、もう終わりやという気がしています。

ただしやっぱり京大の中でどうこうというよりも、こういう話は社会の中では結構受けるんです。というのも、そういう人間がいないとだめだということは、社会の人たちはよく分かっている、実は京大にそういう期待をしているわけですが、京大の中でそれはもうなくなってきていると。ということは僕はこの社会の中で、社会全体からこういうのが消えるというのは、たぶんないだろうと思っています。どこかで

何か生きている。いろいろなことが起こるので、そのうち何かが起こって、そこからまたうまい酒が生まれんかなと。どこから生まれるか分かりません。

(司会) それは、でも時間かかりますね。

(酒井) たぶんかかるでしょうね。だからうちの学生には、とにかく今は緊急避難せよと。むやみに戦うなと言って、離れ小島に避難して好きな酒を造れと言っていますから。それがいつ日の目を見るか分かりません。

(司会) ほかに何か言い残したこととかないですか、いいですか。じゃあ、これで終わりです。どうもありがとうございました。(拍手)